



Metis メティス

1984年生まれ 広島県出身。
 2006年9月メジャーデビュー。
 家族の愛・命・平和などをテーマに
 愛に溢れた名曲を生み出している
 レゲエをルーツにした
 シンガーソングライター。
 2013年3月13日に
 仙台教区主催により開催された
 「3.11東日本大震災・心に刻む集い」に出演。



2つの被災地の復興を願う音色

前号に引き続き、
 シンガーソングライターの
 Metisさんに
 復興に向けた想いを
 綴っていただきました。



流された家屋の中から発見されたピアノ

災害救援本部通信

No.16

発行日：2014年2月11日
 発行所：真宗大谷派宗務所
(組織部)
 発行人：災害救援本部長
 藤戸秀庸

被 災ピアノを直してからは宮城を中心にこのピアノと一緒に無料ライブをやらせて頂きました。その中でも一番印象深い思い出は、2008年から毎年参加している阪神淡路大震災の第8回復興フリーライブ(2012年1月17日開催)に被災ピアノを運び込み、持ち主の鈴木さんやピアノを修理していただいた松木さんに見守られながら、ライブをした事です。また、同月15日に開催された震災祈念コンサートでは、神戸と宮城を中継で結び、コンサートを行いました。この時は、実際に神戸で被災し、震災の痛みの中から復興を遂げた商店街の方からのメッセージを宮城県南三陸町の商店街の方々へと届けました。この試みに私は、鈴木さんをはじめ、東北の方たちに震災から復興へと歩みを続けている心強い神戸の皆さんとの触れ合いを心の支えにして欲しい。そして、神戸の商店街の皆さんはいつも笑顔で、明るく強い方達ばかりなので、そんな街の皆さんのパワーを受け取ってほしいという思いを込めていました。ピアノがあって音楽があって、繋がっている人がいて、初めてそこで生きていく為の希望と活力がみなぎっていく。6年に亘り復興フリーライブに参加して、年々強くなったその思いを形として表すことができました。でも、東日本大震災の被害を目の当たりにしたとき、一時

期は支えあうなんて、頑張るといったって何を？絆って何だろう？と迷う日々でした。そして、投げ出してもいいの？本当にそれは私の本心なの？と自問自答もしました。この問いに対して私が行動することができたのも、初めて復興フリーライブに参加して以来、出会い続けている神戸の皆さんからいただいたエネルギーであり、人は心底希望を信じ、前に進む力を持っている事を私が伝えなければと思ったからです。

ネガティブにならずに、どんな時も上を向き続ける事。下を向いて泣いてる人がいたらそばで寄り添い続ける事が、何よりも大事だということに気づかされた2年半でした。私はそれを音楽を通して行きたいと改めて思いました。1ステージの限られた時間の中、全力で伝えてへトへトになっても、被災された方々の苦しみ、悲しみ、寂しさを語りつくすことはできません。逆に「ありがとう」の一言を東北の皆さんから頂く私自身が救われている、そんなことの連続です。音楽を通して、人と繋がっていくことが出来る。そのきっかけを私に授けてくれた母と父に感謝します。私は大スターでも大物歌手でもありませんので、繋がりに続けている方々は多くないです。でも音楽によって、その人の深い部分に根っこ



の部分に語りかけていきたいと思い毎回ステージで歌っています。とはいっても、まだまだ表現力が身につけていません。一生自分の課題として人生をかけて今回の震災を通して気づいたことを第一に考えて伝えていきたいと思っています。それは日本全国はもちろん、全世界に自分がやり続けていくことが使命だと思っています。

心で動き、互いの心が触れ合い、心の思いが満ち溢れるような曲を、自分らしくこの時代に残していけたら嬉しいです。どんな時でも繋がれる心。その心がひとつに集まるとき、復興への音色が鳴り響いていることを忘れないで下さい。One Love,

寺院防災 マメ知識④



境内建物の耐震診断と、 仏具の転倒落下防止策を 施しましょう

地震では重たい屋根瓦の本堂は、倒壊の危険性が高くなります。建て替え・修繕改築の際、軽量瓦や銅板葺き屋根に変えられた寺院もありました。平生から建物の強度を十分に把握しておくことが必要です。

地域によっては、自治体から補助金が交付される場合があります。詳しくは各市区町村の窓口へお問い合わせください。門前が緊急輸送道路に指定されている場合も交付される可能性があります。

また、建物が残っても仏具等の転倒・落下により破損する場合があります。仏具の下に耐震シートを敷く方法など、寺院の総代や役員とも相談して事前に対策を行いましょう。

大震災からの学び (後編)

～先の見えない現状、そして自然との共生～

現地復興支援センター

前

号に続き、昨年十月初旬、南三陸町語り部ガイドの後藤一磨さんに聞いたお話を伝えする。

被災地の現状と不安

南三陸町防災庁舎の住所は、南三陸町志津川字塩入であり、塩が入ると書く。もともとは海であったが、埋め立てを繰り返して形成された街、この塩入と呼ばれる場所、いわゆる住所が海拔0mを示す場所は、津波によって八十cm地盤が沈下している。現在は十cm戻り、七十cmとなっているが、そうした地盤沈下を起しているため、大潮の満潮時には、排水溝から市内に海水が入ってくる状況である。また、被災した



再開された漁の水揚げ



瓦礫が撤去され整地された海岸



南三陸町防災庁舎

海の脅威と海との共生

地域は危険区域に指定されており、瓦礫等が片付けられても住居を建てる事ができない。後藤さんは「私たちはこれから、被災しなかった二十m以上の大地の森を拓き削り、そこに新しい家、町を作っていくかなければなりません。二年半経った今、風景を見回してみてもどこにそのような場所を作るのか、整備は進んでいない状況です。五十八カ所の仮設住宅に住む六千の人たちは、いつになったら自分の家に入れるのだろうか。八十を超えたお年寄りは仮設だけでは死にたくないというのが口癖になっている昨今です。」という。

今、南三陸町の海を見ると養殖のブイが浮き、何事も無かったように穏やかに見えるが、「船の九割は津波に流されました。海のそばで暮らす以上は、海から収入を得ないと生活できないということが定めます。ですので、八月から残った一割の船を共同で使用し、養殖を開始しました。」と復興に向けた取り組みの説明を受けた。そして驚くのは、一昨年と昨

年の春にワカメが収穫され、ワカメは震災以前のものと比べると、格段に質のよいものが獲れたということである。また、牡蠣は稚貝をロープに吊るし、海に二年おかないと食べられる大ききまで成長しなかったが、夏に入れた牡蠣は翌年一月末には十分な大ききまで成長していたというのである。

これまで二年もかかっていたものが、半年でそれ以上の大ききになるということは凄まじい成長であり、「学者や研究者が調査した結果、今まで人間が長い間海を使い放題使い、ヘドロやゴミなど様々なものが堆積していたのですが、それらを津波が全て掃除してくれたのです。結果として海が五十年若返ったと言われ、また生産力の高い海に戻ったのです。」という。

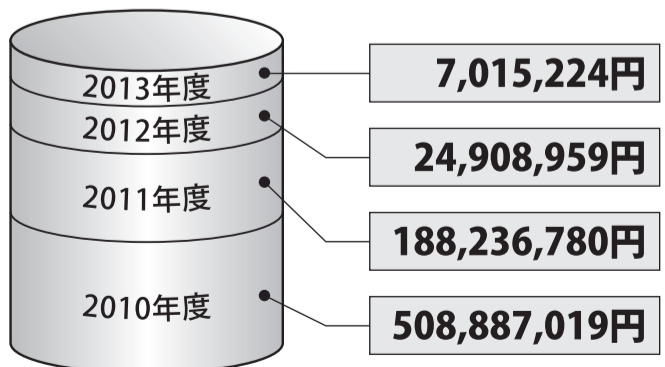
また、これからの生活について「私たちはまた津波がきても、きちんと命を守っていれば、またこの海のそばで暮らしていくということがわかったのです。津波を生み出した嫌な海と想ったこともありますが、実はこの海が私たちを支えているということに改めて思い知らされたのです。」と語られた。

これまで如何に人間が海を汚し、人間の都合で海を使ってきたということに気づかされる。そして、海の脅威はあるものの、海の支えがないと生活できない現実もあり、海と共生していかなければならない関係であることを改めて教えられた。

東日本大震災復興支援(収支報告)

支援資金残額 **1億6,206万2,893円**

救援金総額 7億2,904万7,982円



支出総額 5億6,698万5,089円

給付金総額 476,000,000円

〈給付金内訳〉

①被災教区	289,000,000円
②被災市町村 9県73市町村	176,000,000円
③奨学金(あしなが育英会)	10,000,000円
④真宗教団連合募金 (2011年3月12日~2012年2月28日)	1,000,000円

支援金総額 90,985,089円

2013年度	16,259,961円
2012年度	29,304,328円
2011年度	45,420,800円

〈支援金内訳〉

①放射能汚染測定器購入費	29,920,800円
②宗派主催による一時避難受入事業	28,658,863円
③一時避難受入教区等への補助	28,347,829円
④県外避難者の集い実施教区等への補助	871,800円
⑤原発警戒区域内寺院支援	3,185,797円

多くの救援金をお寄せいただき誠にありがとうございます。皆さまからお寄せいただいた救援金は継続した復興支援を行うべく上記用途にて活用させていただいておりますので報告いたします。なお、引き続きあたたかいご支援をお願い申し上げます。

